



©Yuki Nakase

チェルシーマーケットとハイライン

コロナショック

ニューヨークの3月は寒暖の差が激しく、春らしい気温に油断している矢先に急に冷えて雪が降ることもあります。露の臺が土から顔をのぞかせたり、まだ葉のない木々に小花が咲いたり、もうそこまで来ている春の到来が心躍らせます。今年もひな祭りの頃には日本の春一番を思い起こさせる陽気となりました。ただ、例年なら気温の上昇に合わせてセントラルパークの芝生にワインとチーズをもってピクニックの計画をたてるニューヨーカーも、今年はちょっと様子が違います。3月頭に日本よりも少し遅れてアメリカ東海岸に押し寄せた新型コロナウイルスと“コロナ不安”の波は、次々と催し物の中止や延期をもたらしました。

新型コロナウイルスが職場などで話題に上がるようになったのは、思い返すと1月の中旬でした。携わっていた舞台の初日が明け、2週間ほど無我夢中で没頭していた舞台稽古を終えて久しぶりに注意して読んだ新聞に、アジアでの感染拡大の報道が大きく取り上げられていました。2月上旬のニューヨーク・ファッションウィークに備えて、私たちも健康管理に気をつけなきゃねと、仕事仲間と話したのを覚えています。そしてまたしばらくファッションウィークに全精神を集中していて、数週間後にハッと気が付くと、日本で初めての新型コロナウイルスによって亡くなられた方と横浜港のクルーズ船に関する記事がニューヨーク・タイムズ紙のトップニュースとなっていました。アジアに留まらずイタリアやイランなど世界中にどんどん広がっていく感染マップを見ていて、アメリカのゲートウェイの1つでもある大都市ニューヨークで1人も患者が見つからないのが逆に不気味でした。そしてマスクやハンドサニタイザーの在庫が薬局から消えたのは2月の終わりです。

デザインした公演やイベントの中止の連絡をもらうとき、一番に気がかりなのは私を雇ってくれたプロダクションカンパニーや照明会社の負担です。フリー（セルフ・エンプロイメント）の照明デザイナーにとって催し物の中止は、個人の生活の見直しや節約で当面を乗り

切るよう気をつけるだけで済む（その程度で収まってくれれば願っている）のですが、従業員を抱える中小企業は会社の存続にまで影響を及ぼす可能性があります。その証拠に、2001年の“9/11”アメリカ同時多発テロの直後、破綻したイベント関連会社が相次ぎました。すでに設営されたデザインに関しては、それまでにかかった経費に対して支払いがあったそうですが、契約していた金額の全額が支払われることはなかったそうです。9/11を乗り切ったイベント関連会社の経営者は、当時経営が波に乗っていて貯えがあったが、それでも一時解雇を余儀なくされたと話してくれました。今回のコロナショックでも、同じことが繰り返されるのかと不安です。

いつもよりも随分人気のない静かなマンハッタンので電車や地下鉄内では、小さなクシャミや咳の音だけに皆の注意が注がれているような緊張感が漂っています。いつもなら初対面の人同士の挨拶において礼儀である握手も避けるようアメリカ疾病管理予防センターからの指示があり、親しい間柄でも挨拶のハグを「Do you take hug?」と確認してから行うようになりました。こんな状況下で数少ない利点といえば、個人主義のアメリカ人同士の中に連帯感が生まれることと、いつもは関わりのないコミュニティについて知る機会を得ることです。たとえば、新型コロナウイルスに関する一連のニュースを読む中で、ニューヨークのホームレス・シェルターで暮らす子供たちが11万人以上いることを知りました。ニューヨークにある多くの私立学校がオンラインでの授業体制に切り替えた3月上旬になっても、公立小中学校の休校を躊躇したクオモNY州知事の考えは、低賃金の家庭で育つ子供たちへの気遣いだそうです。勉強だけでなく食事や洗濯においても学校に頼らざるを得ない彼らにとって、休校は居場所を失うことになります。もし舞台とイベントの照明の知識と技術が必要とされなくなった場合、私は社会で何をすれば役立つのか、勉強するいいきっかけかもしれません。